

「読書感想文」よ、

ありがとう。

脚本家 森下佳子

「国語って何の勉強だか良く分かんない。」
小学生の頃、そう思っていた。算数や理科、社会。そういうものは問答無用の勉強感があつた。知らない事を知る、分からない事が分かる。それは「勉強だ！」と幼心にも分かる物だった。

国語も漢字を覚えるとか、暗記に関してはそう思えた。中学生になって、古文や漢文が出て来ると勉強感が増した。ただ、現代文に関しては相変わらず何の勉強だか良く分からなかった。日本語の普段使っている言葉の何を勉強しようというのか。

そんなものだから、読書感想文の意味など、皆目、分からなかった。本を読んで、何となくどんな話だか説明して、どんな風に思ったかを原稿用紙5枚で提出する。ごくごく当たり前の行為の、これって、何の勉強なのか？

残念ながら、鈍い私には学生時代の最後までその意味は分からず、その疑問を先生にぶつけるほどの情熱は持ち合わせず、何となく、ずーっと、棚上げにしたまま大人になった。

しかし、人生はホントに奇妙なもので、この意味の分からなかった「読書感想文」のおかげで、今、私は脚本家として何とか食べていけている現状があるのだった。

脚本のお仕事には「原作付き」と「オリジナル」の2種類のものがある。

で、私の仕事は前者の方が多い。オリジナルがさして得意ではないという現実や、「私が考えるより面白い物語がちま

たに一杯転がってるのに、なんで、わざわざ私のしょぼい頭で話考えなあかんの？ まあ、とにかく、おもしろい方がええやん。」という、ある種言い訳、ある種あきらめ、ある種達観。そんな物がなймаぜになつてそういうことになつていく。ただ、誤解しないでいただきたいが、その物語の素晴らしさを、流れるテーマを、より多くの人に伝えたい。文字を読むものが嫌いな人にもその物語を楽しんでもらいたい。その為の伝え方を私は必死で考えよう！ そんな風には思っているのだ。うん。

脱線失礼。で、「読書感想文」である。私はある時、ハタと気づいたのだ。この原作のある脚本を作ることは実は「読書感想文」を書く作業と非常に近いということに。原作をできるだけ忠実に、できるだけ何一つ変えずにと求められる場合ももちろんあるが、そうでないことの方

テリー」になるし、犯人側から描けば「犯罪小説」になる。起こっている出来事にメスを入れる角度が変わると、物語の見え方はがらりと変わるのである。往々にして、誰かの「君はかけがえのない人だ。」という美しい言葉は、誰かにとっては「君はかけがえのない人ではない。」という残酷な言葉に響いているものだ。

私は主人公ではない登場人物や原作にはいない人物を主役に仮定して、描かれている事象を手がかりにその人の埋もれた物語を想像していく。そこから湧き出て来る思いや言葉を探す、掘りおこす。

さて、私が「読書感想文」を物語に再構成する上で、気にかけており、かつ、最大限に楽しんでいる作業がある。それは「視点の交換」ということである。すごくシンプルな例をあげれば、ある殺人事件を、刑事側から描けば「ミス

森下佳子
もりしたよしこ

1971年大阪府生まれ。東京大学文学部卒業後、会社員の傍ら、プロットライターを始める。半年後の2000年「平成夫婦茶碗」で脚本家としてデビュー。04年のTBSドラマ「世界の中心で、愛をさけぶ」ではドラマアカデミー賞で最優秀作品賞を含む9冠を達成。NHK朝の連続テレビ小説「ごちそうさん」では、第32回向田邦子賞を受賞。「白夜行」「JIN—仁—」「とんび」など、作品多数。

そして、ぶつとい主人公の物語にその登場人物の物語をぶつけてみる。それぞれの思いがぶつかる感情がどつと入って来る、私が予想もしなかった台詞を登場人物たちが口に始める。そこで起こる化学反応は滅法楽しい。私にとってはそれが脚本を書くという作業だ。

これは机上の話だけど、実は現実の人付き合いもそんなものかもしれないなとも思う。私の人生は私が主役だけれど、友達の人生は友達が主役。私の正論とあなたの正論は、正論という意味ではとりあえずは同価値だ。それをわきまえた上で、初めて共感も説教も議論も意味を持つのではないかと思うのだ。作者の視点を相対化し、自分なりの視点や解釈を探す「読書感想文」はその出発点や訓練となりうるものだ。うん、だから、それは中々大事なお勉強だなあと、40を超えて思う今日この頃なのだ。